



「当別新聞以後～状況から～状況へ」
企画室

〒001-0021
札幌市北区北21条
西8丁目2-20-
604 清水方
☎0115770161
編集人
清水 三喜雄

ブログアドレス
smikio1948.org/mikio/
メールアドレス
9891 oltg@jcom.zaq.ne.jp

当別短歌会詠草 (二月)

何時かまた会える日來ると學に 温み残して卒寿の友が 長谷川晴枝
雪こもる篠津の原にさわさわと 霧たつ最中の林しづけき 大口ひろみ
或ひはとケイタイ開けどどこを押すや 呼び音出方も忘れしころに
はなれ住む夫の明け暮れおだしきを ひたに祈りて豆撒く夕べ 大澤隆子
節分が過ぎればスーパード・コンビニで 大量廃棄となる恵方巻き
いつまでも嫁と思いいぬ嫁とらば 自覚もなしに姑となりぬる 後藤まゆみ
磯石万里

この国にはな、どうしても基督教を受けつけぬ何かがあったのだ (宣教師フェレイラ)

＜映画の紹介＞
マーティン・スコセッシ監督
『沈黙～サイレンス～』
(アメリカ映画 2016年)

カトリック作家遠藤周作の渾身の小説『沈黙』(1966年作)の映画化である。2時間42分の大作だ。しかもアメリカ映画である。欧米人が、このキリスト教の異端の匂いすらする日本の小説をどう読み・解釈し・表現するのか、ボクは大変注目した。何故なら、遠藤は、この小説のなかで、キリスト教という苗は、日本の泥沼の精神風土のなかで腐ってしまおうという宣教師の絶望的な呻き、それが彼を「転ばせた」(棄教)、と描いているのだから。キリスト教圏の欧米人は、この物語をどう受け止めるのか、ボクはずっと気になっていた。

たスコセッシ監督は、小説『沈黙』との出会いによって、自分の信仰について、宗教や異文化の衝突・理解について深く思索し、28年の歳月をかけて、この映画を完成させた。アメリカの著名な監督であるにもかかわらず、ハリウッドの商業主義と距離をおいた作家主義の作品でもある。どうしても撮りたかったという切実さと真剣さがひしひしと伝わってくる、「この一本」なのである。

監督マーティン・スコセッシといえは、若き日のロバート・デニーロ主演『タクシードライバー』(1976年)の衝撃が忘れ難い。自身がイタリア移民の力トリックの家庭に育つ

しても、スコセッシ監督は、そんなことは意に介さず揺るがない信念を保持しているように思われる。音楽やセンチメンタリズムで映像を劇的に盛り上げるような浅はかさがない。冒頭とラストシーンで、湿潤な日本の風土のなかで虫の声だけが聞こえてくるが、劇的に流れる音楽はほとんどない。会話、会話の連続なのである。熾烈なキリシタン弾圧、拷問のシーンも、むしろ控え目だ。驚くほど、原作に忠実でありながら、スコセッシ監督の思考集が全編を支配する。

戦国時代の末期から江戸時代における日本人キリスト教(カトリック)信者のことをポルトガル語でキリシタンという。F・ザビエル以来、「イエズス会」のポルトガル人やイタリア人の宣教師らによって布教された。キリシタンは、「転ぶ」(棄教)か公然と信仰表明が出来なくなつた。しかし、幕府は40年以後も、キリシタン信仰せん滅のために、「踏み絵」や「宗門改め」の制度を設け、密告を奨励し、執拗にキリシタン根絶やしの手段を取った。その先頭

に居たのが宗門改め役井上筑後守である。狡猾な井上筑後守による甘言と苛烈を極めた拷問で、宣教師もキリシタンも根絶やしにされていく。それに抗して、平戸や長崎、天草(島原の乱は、1637-8年)地方では、集团的(村共同体など)に、表面は仏教徒を装いながらキリシタン信仰を保持する人々がいた。彼らを「隠れキリシタン」と称す。

この隠れキリシタンに苛烈な攻撃が仕掛けられた時代が、この映画の舞台なのである。1640年、若きポルトガルの司祭ロドリゴ(アンドリュー・ガブリエル・ド・ソウザ)とガルベ(アルド・ド・ソウザ)が、長崎の寒村に辿り着く。イエズス会の高名な神父であり、彼らの師でもあったフェレイラ(リーアム・ニーソン)が、弾圧に屈して「転んだ(棄教)」という信じられない知らせ

が本国に届き、その真相を確かめるべく日本に潜入したところから物語は始まる。マカオから手引きしたのは棄教した日本人キチジロー(窪塚洋介)である。既に布教などは絶望的である。潜入した隠れキリシタンの村で、若きパードレ(宣教師)が見たのは、「踏み絵」を踏まない村人たちへの残忍な処刑と雄々しい殉教の姿だった。簾巻されて無造作に海に放り込まれる隠れキリシタンたち(なんとこの命の軽さか)。抗議したガルベもまた水死させられる。何故、神はこの期に及んでもなお「沈黙」されるのかという疑問に、ロドリゴは苦しむ。極貧の暮らしのなかで隠れキリシタンたちの、司祭ロドリゴへの、救いを求める姿の切実さが高さは美しい。キリストよりも聖母マリアに傾斜したキリシタンの祈りは、欧米人にはどう映るのだ

を弱か者に生れさせておきながら、強者の真似ばせるとテウスさまは仰せ出される。それは無理無法(うそもやしい)《聞いてつかわさしい、パードレ》キチジローは信徒たちに聞こえるような声でわめいた。「この俺は転び者だとも。だとして一昔前に生れあわせていたならば、善かあ切丹としてハライソに参ったかも知れん。こげんに転び者よと信徒衆に蔑(みこ)なされずすんだでありました。禁制の時に生れあわされたばかりに……恨めしか。俺恨めしか」と。

様々な困難(制作費訴訟問題、企画の中止、脚本の書き直しなど)を乗り越えて、粘り強く映画化を実現した作品であるが、独り善がりの意気込みや気負いが、驚くほどない。小説『沈黙』へのリスベクトと節度には感心する。そのかわり、『沈黙』と向き合ってきた長考集が、2時間42分の長さが必要としていて、アメリカ人女性批評家が、この映画に「単調さや冗長さ、平板さ」を指摘

監督は、そんなことは意に介さず揺るがない信念を保持しているように思われる。音楽やセンチメンタリズムで映像を劇的に盛り上げるような浅はかさがない。冒頭とラストシーンで、湿潤な日本の風土のなかで虫の声だけが聞こえてくるが、劇的に流れる音楽はほとんどない。会話、会話の連続なのである。熾烈なキリシタン弾圧、拷問のシーンも、むしろ控え目だ。驚くほど、原作に忠実でありながら、スコセッシ監督の思考集が全編を支配する。

戦国時代の末期から江戸時代における日本人キリスト教(カトリック)信者のことをポルトガル語でキリシタンという。F・ザビエル以来、「イエズス会」のポルトガル人やイタリア人の宣教師らによって布教された。キリシタンは、「転ぶ」(棄教)か公然と信仰表明が出来なくなつた。しかし、幕府は40年以後も、キリシタン信仰せん滅のために、「踏み絵」や「宗門改め」の制度を設け、密告を奨励し、執拗にキリシタン根絶やしの手段を取った。その先頭

に居たのが宗門改め役井上筑後守である。狡猾な井上筑後守による甘言と苛烈を極めた拷問で、宣教師もキリシタンも根絶やしにされていく。それに抗して、平戸や長崎、天草(島原の乱は、1637-8年)地方では、集团的(村共同体など)に、表面は仏教徒を装いながらキリシタン信仰を保持する人々がいた。彼らを「隠れキリシタン」と称す。

この隠れキリシタンに苛烈な攻撃が仕掛けられた時代が、この映画の舞台なのである。1640年、若きポルトガルの司祭ロドリゴ(アンドリュー・ガブリエル・ド・ソウザ)とガルベ(アルド・ド・ソウザ)が、長崎の寒村に辿り着く。イエズス会の高名な神父であり、彼らの師でもあったフェレイラ(リーアム・ニーソン)が、弾圧に屈して「転んだ(棄教)」という信じられない知らせ

が本国に届き、その真相を確かめるべく日本に潜入したところから物語は始まる。マカオから手引きしたのは棄教した日本人キチジロー(窪塚洋介)である。既に布教などは絶望的である。潜入した隠れキリシタンの村で、若きパードレ(宣教師)が見たのは、「踏み絵」を踏まない村人たちへの残忍な処刑と雄々しい殉教の姿だった。簾巻されて無造作に海に放り込まれる隠れキリシタンたち(なんとこの命の軽さか)。抗議したガルベもまた水死させられる。何故、神はこの期に及んでもなお「沈黙」されるのかという疑問に、ロドリゴは苦しむ。極貧の暮らしのなかで隠れキリシタンたちの、司祭ロドリゴへの、救いを求める姿の切実さが高さは美しい。キリストよりも聖母マリアに傾斜したキリシタンの祈りは、欧米人にはどう映るのだ

を弱か者に生れさせておきながら、強者の真似ばせるとテウスさまは仰せ出される。それは無理無法(うそもやしい)《聞いてつかわさしい、パードレ》キチジローは信徒たちに聞こえるような声でわめいた。「この俺は転び者だとも。だとして一昔前に生れあわせていたならば、善かあ切丹としてハライソに参ったかも知れん。こげんに転び者よと信徒衆に蔑(みこ)なされずすんだでありました。禁制の時に生れあわされたばかりに……恨めしか。俺恨めしか」と。

ロドリゴは、井上筑後守(イエッセ尾形)の取り調べを受ける。井上の、柔らかなて巧み「転び」の糸に少しずつカラめとられていく。通辞(浅野忠信)からの描さぶりを拒絶しながらも動揺は隠せない。

(2面へ続く)



日本を舞台に描く
マーティン・スコセッシ監督
渾身の一作が遂に完成。
2017年1月21日(土)

面白いぞ！冬の夜の動物園



2月11日(土)、12日(日)に円山動物園(札幌市中央区)で「冬の夜の動物園」(夜8時まで開園)というイベントが開かれた。早速11日夜、行って来た。動物園は、子供じゃなくてもワクワクするよね。旭山動物園見学以来数年振りの動物園は楽しかった。しかも、初めて、ライトアップされた冬の夜の動物園というのは、もうそれだけで面白い。親子連れも多かった。動物園にやってきた子どもたちは、もう体内から突き上げるワクワク感に踊るように夢中だった。カップルや大人の見学者も多くて、でも園内は三々五々のゆとりもあって、風もなく月がカーンと冴えていて、何だか宮澤賢治の世界だな、などと思いながらぶらぶらした。

夜、生き生きとしている動物って結構いるんだね、吃驚した。最初にアムールトラの大きさにのけ反って、ユキヒョウの美しさとしっぽの豊かさに見惚れたり、レッサーパンダの動き回る姿を追い掛けたりと、あっという間だった。園内は積雪も多くて、道は「雪灯りの路」みたいになっていて、動物たちの館に着くと、屋外のスペースにもたっぷり積雪が。その雪上に座って窓越しに寄ってくる巨大なヒグマ(毛並みがいいんだ、こいつが又)の迫力にはくぎ付けになる。

でもなんといっても雪の上では、シンリンオオカミの泰然とした姿が、辺りを払うように美しかった。今も日本列島にひっそりと息づく山岳信仰の「オイヌさま」はニホンオオカミのことだった。オオカミは明治30年代には絶滅したと言われている。でも、13年間北海道山中を逃げ続けた故劉連仁さんは、当別の山林から生還した後、山中でオオカミを見たと言っている。ボクは、劉さんの証言を今でも信じている。(S)



工藤さんに、ハルモ二たちの気持ち聞いてよかった。彼女たちの思いこそが、すべての出発点であるのだから。(S)

二〇一五年十二月二八日、突然、日韓両外相は、日本軍「慰安婦」問題に関して「合意」を共同記者発表した。日本政府からの十億円拠出金で、「もう、この問題は解決済みにする」という態度が見え見えの安倍政権に対して、日韓の市民からの怒りの声が高まっている。韓国民の怒りは、ちゃんとした謝罪もない内容に「合意」した韓国政府にも向けられている。韓国民による「少女像」の設置の広がり、日

日本軍「慰安婦」問題は解決したのか？ 「ナヌムの家」ボランティア

工藤千秋さんに聞く

本政府は駐韓大使や釜山総領事の一時帰国という強硬策をとって、事態は収拾のメドが立っていない。

◆ いったい何が問題なのか。

韓国で日本語教師をしていて、長い間「ナヌムの家」(注)のボランティアとして活動をしていた工藤千秋さんを招いての緊急の集いが二月三日(金)札幌北光教会で開かれた。民主的な議題で旅行・ツアー



奥の中央が工藤千秋さん

を企画運営している「株」旅シブテム友の会が主催した。工藤さんのお話は、自身が「ナヌムの家」でハルモ二(韓国語で祖母、おばあちゃん)の意)たちの話を徹底的に聞くことをボランティアで続けているから、彼女らの感情の機微を受けとめていて、新聞記事やテレビレポートでは分からない雰囲気

が分る。ハルモ二たちと工藤さんとの信頼関係は深いことが分かる。今度の「合意」も、基本的に肝心なのは、日本軍に性的奴隷にされた被害者である彼女らの気持ち・感情である。ハルモ二たちは、日本政府は「謝罪していない」ということを見破っている。この点が大

事だ。工藤さんのお話を伺って、よく分かったのは、日韓両政府のやり取りで形だけ「謝罪」を

見せても、それは「私たちに謝ったことにはならないぞ」という思いがハルモ二たちには頑としてある、ということだ。日本政府が拠出する十億円が、支援金ではなく、賠償あるいは「償い金」であれば、軍の責任(したがって政府の責任)を認めたことになるであろう。しかし、日本政府は絶対に賠償金だと言わない。責任の所在を曖昧にしたまま払うという支援金というのは、いったいどういう筋の金なのか。

◆ 現在、「ナヌムの家」には九人のハルモ二が居るが、平均年齢は九〇歳を超え、五人は寝たきり、多くが認知症に罹り、訪れる人達に対応で

さるの「二名だ」という。元氣もなくなっています、と工藤さんは心配する。善意からか悪意からか、彼女らを「見世物」扱いしているという批判に対して、ハルモ二自身が、日本軍の性奴隷だったと「私たちがウソをついているというの

なら、『見世物』にもなる。ちゃんと感じて、本当のことを日本に伝えなさい」と語った、という。市民が建立した平和の家像である「少女像」についても、少女像について吉見義明中央大学教授はこう指摘する。『加害国が被害国に再発防止措置としての記念碑を撤去しろと要求するのはありえないことだ。見舞金を出すから、被害を受け

あるだろう。カネで頬を叩いて、いつまでもゴチャゴチャ云うな、という安倍政権の態度は恥ずかしい。『加害者側が謝罪はこれで終わりというのには被害者の怒りを買うだけであり、最終的かつ不可逆的に解決され』た、ということができるのは、被害者だけであるはずだ。『(吉見義明「真の解決に逆行する白韓慰安婦」『世界』二〇一六年三月号)』

あるだろう。カネで頬を叩いて、いつまでもゴチャゴチャ云うな、という安倍政権の態度は恥ずかしい。『加害者側が謝罪はこれで終わりというのには被害者の怒りを買うだけであり、最終的かつ不可逆的に解決され』た、ということができるのは、被害者だけであるはずだ。『(吉見義明「真の解決に逆行する白韓慰安婦」『世界』二〇一六年三月号)』

(注) 「ナヌムの家」とは

日本軍「慰安婦」被害女性が共同生活をしている空間、それが「ナヌム(分かち合い)の家」です。一九九二年仏教界を中心に集まった募金をもとにソウル市内に「ナヌムの家」が作られました。一九九五年には土地と建物の無償協力により京畿道広州市に移転しました。二〇〇〇年からは社会福祉法人として支援者からの後援によって運営されています。

高齢になったハルモ二たちは、ナヌムの家で日々の訪問者たちと豊かな自然に囲まれながら余生を送っています。現在までに韓国国内では二三八人が被害申告をし、四四名(二〇一六年五月現在)が生存されており、平均九〇歳のハルモ二たちが現在九名暮らしています。生きている歴史、ハルモ二たちの安息の場所がナヌムの家です。

しかし問題の根源は、安倍首相が心から謝罪していないことと誰にも見え見えなところにある。少女像について吉見義明中央大学教授はこう指摘する。『加害国が被害国に再発防止措置としての記念碑を撤去しろと要求するのはありえないことだ。見舞金を出すから、被害を受け

大澤勉水彩画個展

1月11日～31日／当別町赤レンガふれあい倉庫



大澤勉「晴冷寒風」(F6号)
(大澤さんのコメント～金沢橋のたもとから当別高校を望む位置。この付近は、絵になるスポットが多いです。)

当別町在住の孤高の水彩画家大澤勉さんの水彩画展が開かれた。当別町ふれあい倉庫が主催している。

新作数点を含む18点の小さな水彩画展である。こじんまりした会場に入ると、空気感が違う。東京から干歳に降りると、ああ北海道の空気は違うな、と感じるが、そこから当別に来るとさらに一段と、その違いを肌で感じる人が多いが、この会場の空気感はそれにも似ている。

すべてが、当別の風景を描いた作品というせいもあるが、当別という地の風土が、「農民」の目からもう一度「画家」の目を通して描かれる。ここが大事だ。当別の四季の風景に対する全肯定があって、清潔な筆のタッチと相俟って、会場に爽やかな風が流れる。「木漏れ日の森」や「梱包ロールのある風景」などが印象に残る。

ただ、見慣れた景色の描写の確かな技法の長い蓄積の上に立った、もうひとつの地平、「見えないもの」や時の遠近法など追求すべき課題も段々と見えてきているのではないだろうか。

小品ながら、「黄昏刻」が底光りしていて良かった。(S)

植村隆、

パワーアップしていたぞ！

植村裁判札幌訴訟第六回口頭弁論弁論報告・外岡秀俊講演会

二月一日(金) 札幌市教育文化会館で植村裁判(注)の報告と、元朝日新聞記者外岡秀俊さんの講演会が開かれた。裁判での、原告側弁護士らの気魄の弁論の勢いそのまま、活気に溢れた集いとなった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

この日開かれた札幌訴訟第六回口頭弁論について、小野寺信勝弁護士から報告があった。櫻井よしこ氏の表現は名譽棄損に当たるか否かについて論戦では、被告側を論破して「名譽棄損にあたる」という(第一段階)が今日で終わった。

(注)「植村裁判」とは
ジャーナリスト櫻井よしこ氏と西岡力東京基督教大学教授は、朝日新聞記者だった植村隆さんが1991年に従軍「慰安婦」について書いた記事を「捏造」だと決めつけ、2014年2月頃から週刊誌やネットで誹謗中傷を繰り返しました。そのため植村さんは当時内定していた大学への教授就任を断られ、さらに自身だけではなく非常勤講師を務める北星学園大学と家族も脅迫メールやネット書き込みなど激しいパッシング被害を受けました。植村さんは「私は捏造記者ではない」と訴え、2015年1月に両氏と出版4社に対して名誉回復と損害賠償を求める民事訴訟を起こしました。東京地裁と札幌地裁で裁判闘争は続いています。

この裁判を、我々市民は注視していかなければならないよね。それにしても、植村さん、沖縄でパワーをもらったようだ。元気でとても良かった。(S)

「ポスト真実」から市民は注視していかなければならないよね。それにしても、植村さん、沖縄でパワーをもらったようだ。元気でとても良かった。(S)

「ポスト真実」から市民は注視していかなければならないよね。それにしても、植村さん、沖縄でパワーをもらったようだ。元気でとても良かった。(S)

「ポスト真実」から市民は注視していかなければならないよね。それにしても、植村さん、沖縄でパワーをもらったようだ。元気でとても良かった。(S)

ポスト真実とは

「ポスト真実」というのは、事実に基づかないウソと偽りの政治言葉のこと。ただの嘘つきではありませぬ。

それを支えているのが、ニュースの受けとめ方の変化だろう。事実調査の裏付けに記者たちが苦心した取材による新聞紙面などから知るといふ形が薄れ、個人的な趣味や感覚が近い友達などのSNSなどでニュースが共有される。ネットのニュースは、苦勞した事実確認など飛ばして裏付けのない

「ポスト真実」から市民は注視していかなければならないよね。それにしても、植村さん、沖縄でパワーをもらったようだ。元気でとても良かった。(S)

「ポスト真実」から市民は注視していかなければならないよね。それにしても、植村さん、沖縄でパワーをもらったようだ。元気でとても良かった。(S)

「ポスト真実」というのは、事実に基づかないウソと偽りの政治言葉のこと。ただの嘘つきではありませぬ。

それを支えているのが、ニュースの受けとめ方の変化だろう。事実調査の裏付けに記者たちが苦心した取材による新聞紙面などから知るといふ形が薄れ、個人的な趣味や感覚が近い友達などのSNSなどでニュースが共有される。ネットのニュースは、苦勞した事実確認など飛ばして裏付けのない

「ポスト真実」から市民は注視していかなければならないよね。それにしても、植村さん、沖縄でパワーをもらったようだ。元気でとても良かった。(S)

「ポスト真実」から市民は注視していかなければならないよね。それにしても、植村さん、沖縄でパワーをもらったようだ。元気でとても良かった。(S)

(清水 三喜雄)